

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

東アジア聖公会主教会の報告

神戸教区主教 アンデレ 中村 豊

今年度の主教会は10月7日(水)から13日(火)まで、カンボジアのプノンペンで開催され、各国より計18名の主教たちが参集しました。

○数字で見るカンボジア

人口は約1300万人で、人種別でいえば、カンボジア人が90%、ベトナム人5%、中国人1%、他4%で、識字率は約70%です。産業は、農業33.4%、工業26.3%、サービス業34.2%、他6.1%となり、内戦により人口の約15%が失われ、貧困、道徳の退廃、HIV/エイズ、麻薬が社会問題となっております。

宗教別では、仏教91%、イスラム2%、キリスト教2.5%(内カトリック教徒2%)他4.4%です。礼拝堂の数は、4060の仏教寺院、247のモスク、キリスト教会・伝道所は2470存在します。

○聖公会宣教の現状

聖公会が最初に足を踏み入れたのは1993年で現在、プノンペンに2つ、地方に5つの教会・伝道所が存在し、プノンペン市内の教会では、日曜日にはカンボジア語、中国語、英語による礼拝が執行され、若者から老人まで、3、40名の信徒がそれぞれの礼拝に出席します。アメリカとマレーシアから1名の宣教師とカンボジア人ミュン・ヒー司祭に加え、数名の伝道師・カタキストがカンボジア宣教に遣わされており、同時に、内戦で痛手を負った国の再建のため、教役者のほとんどがいずれかのNGOに属し、地域社会復興に尽力しております。

プノンペン市郊外にある、シンガポールの聖アンデレ大聖堂のHOPE基金(Humanitarian Outreach for Peace on Earth)の一環として設立されたホテル学校・養護施設を見学しました。

養護施設の目的は、6才から18才の孤児、極貧化にある家族の子どもたちなど120名を収容し、寝食を共にしながら自立までの間、保護することです。つまり、ストリート・チルドレ

□会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加)
および12月5日以降)

12月

- 12日(土) 各教区財政担当者連絡協議会(牛込聖公会聖バルナバ教会)
- 14日(月) 主事会議
- 14日(月) TOPIK担当者会議

2010年1月

- 9日(土) 正義と平和・ジェンダープロジェクト(京都)
- 13日(水) 広報主査会
- 14日(木) MTS東アジア協議会
- 15日(金) 憲法法規委員会
- 17日(日) ~18日(月) 青年担当者会
- 18日(月) ウィリアムズ主教記念基金委員会(立教)
- 18日(月) 正義と平和・日韓協働プロジェクト
- 19日(火) 渉外主査会
- 20日(水) 主事会議
- 21日(木) ハラスメントに関するアンケート分析作業(京都)
- 22日(金) 人権・女性・ジェンダー担当者会(京都)
- 25日(月) 礼拝委員会
- 25日(月) ~26日(火) 文書保管委員会
- 26日(火) ~27日(水) 正義と平和・沖縄プロジェクト

2月

- 1日(月) 正義と平和委員会
- 4日(木) 57-9 常議員会
- 5日(金) ~6日(土) プレ宣教協議会準備会
- 10日(水) 臨時主教会
- 11日(木) 中部教区主教按手・就任式(中部教区主教座聖堂)
- 15日(月) 主事会議
- 23日(火) ~25(木) 主教会(熊本)
- 23日(火) ~25(木) 管区共通聖職試験

(次頁へ続く)

☎ 管区事務所冬期休業

12/30(水) ~ 1/5(火) の間休業いたします。よろしくお祈りします。

ンを防止する一環として、この施設の重要性があるわけです。

ホテル学校も全寮制で、約150名の男女学生が学んでおります。1年目は月曜日から金曜日まで、英語をみっちり勉強します。2年目には、ホテルのホスピタリティー学習と実習、コンピューターソフトの習得が待っております。観光立国として、将来に求められる人材をこの学校で育成しており、この施設は、戦後復興事業の一環として位置づけられています。この2年、脱落者は皆無で、10数名の学生が、毎年キリスト教に入信しているそうです。勉強への取り組みは真剣そのもので、若者が職を手にすることが非常に困難なカンボジアにあって、卒業証書を手にしえない限り、自分の将来を切り開くことができない、との切実感がひしひしと伝わってきました。

○内戦の悲劇とキリストの福音

カンボジアは1975年、ポル・ポト率いるクメール・ルージュ(カンボジア共産党)が勢力を伸ばし内線が勃発、クメール・ルージュ軍が首都を占領したとき、ここに住む全員を強制退去させ、同時に反政府勢力を捕らえ、虐殺しました。内戦が長引き、日本の連合赤軍と同じように、クメール・ルージュ内で権力闘争が発生し、内部で殺し合いが始まりました。1979年にはベトナム軍が侵攻し占領、1991年に至り、ようやく和平協定が成立、平和が訪れました。この間、約150から200万人の人たちが飢餓や強制労働、内線で亡くなり、反政府勢力者として殺害されていったのです。その傷跡は市内の刑務所跡や郊外の「キリング・フィールド」で見ることができます。

会議2日目の聖餐式で、カンボジア人のミューン・ヒー司祭が説教されました。幼い頃にはすでに共産党支配下であり、彼の出身地であるタケオでも、多くの人たちが飢えに苦しみ、司祭は路上にころがっている人間の腕を見たと言います。人肉まで食べ飢えをしのいだのです。

(前頁より)

3月

3日(水) 聖公会・ルーテル教会合同委員会

<関係諸団体会議等>

2010年

1月6日(水) NCC常議員会

1月14日(木) NCC女性委員会

1月19日(火) 都宗連



主日礼拝後、信徒と共に

ヒー司祭は、内戦が始まると共に、両親と別れ別れになりました。ようやく終戦を迎えましたが、両親は自分の家に帰ってはきませんでした。生き残った村の人たちが、両親は殺されたのだ、と教えてくれました。両親を失い、絶望のどん底に落とされましたが、キリストの福音に触れ、献身したのです。彼は説教の途中、感極まって声を詰まらせてしまい、主教や主教夫人たちの涙を誘いました。

約30%のカンボジア人は心に傷を持ちながら生活しています。この人たちにキリストの慈愛と癒しを伝えることの重要性を痛感したのが、今回の主教会でした。



この挨拶は何のことか

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤牧人

すてきな言葉に出会いました。それは「言葉は時には人に希望を与え、その希望が物事を良い方向に変える。」というものです。そこから考え、思いました。「クリスマス おめでとうございます。」という挨拶に共鳴していききたいものだ、と。

マリアが天使ガブリエルから告げられた「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」という言葉聞いて、「いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」と聖書は記します。ここは深く黙想できる箇所ではないでしょうか。そして、「クリスマス」の実現はここから始まったとも言えるのではないのでしょうか。もちろん神のご計画ではあるが、マリアが考え込み、それを受け入れていく出来事が、物事を良い方向へと変えていったのではないだろうか。良い方向とは、救い主の誕生ということです。平和の君の誕生ということです。「クリスマス おめでとうございます」という挨拶の言葉が意味することは、本当の救いがそこにあるということ、本当の平和がそこにあるということなのではないでしょうか。そして、この事実私たちに一人ひとりが共鳴していくとき、その救いが、その平和が、現実化していくのでしょうか。

私にはクリスマスが近づいてくると、またクリスマスの期節になると思い出されてくるひとつの詩があります。16世紀の宗教詩人であったシレジウスという人が書いたものです。「キリスト 千度ベツレヘムちたびに生まれたもうとも 汝のうちに生まれざれば 汝なお救われず」本当にそうだと思いますでしょうか。

そして、キリストが私のうちに生まれるとはどういうことなのかを見出していくことなのでしょう。それを思い巡らすときに、私たちに豊かにしてくれるものがあ

ります。それは、「Common Worship - Times and Seasons」の「クリスマスのキャロル礼拝」の中にある「招きの祈りと導入」の言葉です。この礼拝式文を横浜教区の中堅司祭が翻訳されました。それを分けていただいたので、皆さんにもお伝えし、共鳴し、良い方向へと活用していただければと思いました。

わたしたちは御父の臨在のもと、降誕の大いなる宴を祝うために、神の家族としてともに集りました。この礼拝において、わたしたちはキリストの誕生の良き知らせを聞き、その知らせを迎え入れます。そして、わたしたちはキャロルを喜び歌い神に感謝を献げます。

わたしたちはキリストの名においてともに集り、キリストが救いのために来られた世界のために祈ります。

教会のために祈ります。わたしたちの世代が、自らを新たにして神の聖なる知恵へと委ねることができますように。そして、とても貧しい世界に神の愛の良き知らせを伝えることができますように。

世界のために祈ります。すでにキリストのものとした世界のために。すべての人びとが世界における未来への責任を認識できますように。そして、降誕のみ告げによって命を吹き込まれ、いたるところで正義、自由、平和を確立するためにともに働くことができますように。

特別な困難のうちにあるすべての人びとのために祈ります。病気の人、不安な人、孤独な人、恐れている人、希望を失った人のために。幼子キリストの平和と光によって、暗闇にあるすべての人びとに希望と癒しがもたらされますように。

愛するすべての人びと、あるいは、わた



したちに祈ることを求めた人びとを、天におられる父の尽きることのない慈しみにゆだねます。そして、キリストご自身が教えられたように、ともに祈りましょう。(この後に主の祈りが続きます。)

ここにも「クリスマスおめでとうございます」という挨拶の言葉がもつ意味が教えられているの

ではないでしょうか。

今年もクリスマスを記念する時を迎えることができました。私の中にキリストが生まれ、今の世にキリストが生まれ、そして、平和の君の姿をすべての人が見るができるように、私たちキリスト者は、それぞれの場で励んで行きたいものです。

★ ＊ ☆

□常議員会

第57総会后第8回 11月25日(水)

主な決議事項

1. 管区審判廷審判員承認の件
主教会より指名があり、総会に代わって承認した。
山田晃二氏(北関東)〔秋江孝吉氏逝去に伴い〕
2. 宣教150周年記念礼拝の信施奉獻先の件
カンタベリー大主教よりの要請を受けて、奉獻先を「カンタベリー大主教自由資金」(大主教の裁量で困難な状況下にある聖公会への支援等に用いられる)に決定した。
3. 「MTS オナラリーチャプレン研修資金」を「MTS 東アジア協議会資金」に名称変更する件
提案者に、名称を再検討し、再提案するよう求めることとした。
4. 2009年度大齋克己献金国内伝道強化プロジェクト選定の件
計画提出者(東京教区)の申請体制が整わないため、継続審議事項とした。
5. 2009年度管区一般会計収支予算承認の件(責任役員会決議)一承認
6. 2010年度管区一般会計補正予算案見送りの件(責任役員会決議)一承認
7. 宣教150周年記念行事記録作成に関する件
8. 首座主教海外出張承認・追認の件
出張目的: シンガポール教区100周年記念

公 示

救主降生2009年12月7日
日本聖公会
首座主教 ナタナエル植松 誠 ④

神のお許しがあれば、
司祭 ペテロ洪澤一郎の主教按手式ならびに日本聖公会中部教区主教就任式を下記のとおり執行いたします。
主にある兄弟姉妹、ことに日本聖公会に属する聖職、信徒の代祷を求めます。

記

日時: 2010年2月11日(木) 午前10時
式場: 日本聖公会中部教区主教座聖堂
名古屋聖マタイ教会
名古屋市昭和区明月町2丁目53-1
司式: 首座主教 ナタナエル植松 誠
説教: 主教 サムエル大西 修
祭色: 赤

以上

式典出席のため

期間: 2009年11月28日~12月1日

□主事会議

第57総会期第15回 11月18日(水)

主な協議事項

1. 第24回外キ協全国協議会への代表派遣に関して
2010年1月28日(木)~30日(土)、K

CC(在日韓国基督教会館)、大阪で開催の外キ協全国協議会に、春日 隆司祭または春日 隆司祭の推薦する者を派遣することとした。

主題:「韓国併合から100年／他民族・他文化社会の宣教課題」

2. 聖公会アジア・太平洋地域気候変動ネットワークへの資金拠出に関して

2010年9月、中国、韓国にて開催予定同ネットワーク交流会議開催のため、資金拠出が求められた。アジア・太平洋地域平和・和解資金から20万円を支出することとした。

3. WCC主催IEPC(International Ecumenical Peace Convocation)開催支援金に関して

WCCより、2011年5月17日～25日、ジャマイカ・キングストンにて開催のWCC国際エキュメニカル会議の開催支援が求められ、次のとおり決定した。

「協力金その他」よりCHF 1,250,-(約10万円)を支出する。

4. 難民・移住労働者ネットワーク会議に関して

2010年1月11日(月)～14日(木)、香港にて開催の掲題会議への出席者について検討した。

5. TOPIK(韓半島の平和統一に向けて)に関して

TOPIK担当者会議より提案の下記事項について、次のとおり決定した。

TOPIKの働きに協働し北朝鮮人道支援のために「アジア・太平洋地域平和・和解」資金より支援金を支出することとし、金額については総主事と宣教主事の協議に委ねることとした。

2009年教区会選出常置委員

北海道	聖職 信徒	大町信也 沖田紀夫	藤井八郎(長) 遠藤淳治	下沢 昌 石塚正史
東北	聖職 信徒	八戸 功(長) 阿部禧典	中山 茂 長井 淳	越山健蔵 渡部和夫
北関東	聖職 信徒	斎藤英樹(長) 谷川 誠	輿石 勇 横川 浩	小野寺 達 菊池邦香
東京	聖職 信徒	大畑喜道(長) 松田正人	笹森田鶴 松平健次	下条裕章 黒澤圭子
横浜	聖職 信徒	長野 睦 中林三平	三原一男(長) 宮崎道忠	河崎 望 佐藤尚敏
中部	聖職 信徒	土井宏純(長) 池住 圭	中尾志朗 高橋俊夫	西原廉太 塚田一宣
京都	聖職 信徒	黒田 裕 三木清樹	宮嶋 眞(長) 伊藤美佐子	池本則子 川村寿一
大阪	聖職 信徒	竹内信義(長) 佐野信三	山本 眞 長野泰信	山野上素充 鈴木光子
神戸	聖職 信徒	芳我秀一(長) 松田嘉彦	上原信幸 東 弘彦	小南 晃 宮永好章
九州	聖職 信徒	濱生正直(長) 東 美香子	堀尾憲孝 細川眞二	柴本孝夫 山本耕之
沖縄	聖職 信徒	上原榮正(長) 大倉信彦	高良孝太郎 真喜屋 明	戸塚鉄也 高峯初子

6. 2010年大齋克己献金「国内伝道強化のため」に関して

東京教区より申請が出された。主事会議で内定した後、常議員会に提出する。

7. 2009年度管区一般会計収支予想及び補正予算案策定に関して

収支予想の結果、大きく補正する要因は見当たらず、法規第182条の規定に照らし、補正予算を組む必要性はないと判断した。

8. 2010年度管区一般会計収支予想及び補正予算案策定に関して

収支予想の結果、大きく補正する要因は見当たらず、法規第182条の規定に照らし、補正予算を組む必要性はないと判断した。

9. 祈祷書・聖歌集の版權使用に関して
使用規定を検討した。

次回以降の会議

2009年12月14日(月)、2010年1月20日(水)

□各教区

教区梅村昌弘司教 説教：三鍋裕主教

横浜

- ・ 聖職按手式 12月19日(土) 10時半 横浜聖アンデレ主教座聖堂 司祭按手：志願者 執事 ジェローム村上守旦
- ・ カトリック・聖公会 キリスト者一致祈禱週間 祈りの集い 2010年1月24日(日) 16時 カトリック菊名教会 司式：カトリック横浜

† 逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 テモテ山本 登 (大阪教区、退職)

2009年12月4日(金) 逝去。(81歳)

《人 事》

東北

司祭 ドミニコ李 贊熙 (イ・チャンヒ 大韓聖公会テジョン教区)

2009年11月24日付 日本聖公会の「大韓聖公会をパートナーとする宣教協働者招聘事業」に基づき、大韓聖公会大田教区より、宣教協働者として受け入れる。

主教座聖堂付および仙台基督教会勤務とする。(聖ペテロ伝道所居住)

東京

司祭 朴 美賢

2009年9月1日付 聖愛教会協力司祭任命

<信徒奉事者認可及び分餐奉仕許可> 2009年4月1日付 (任期：2010年3月31日)

(聖オルバン教会)

原 佳和代

(清瀬聖母教会)

工藤敦司、菅浪正雄、麦倉 稔

(牛込聖公会聖バルナバ教会) 石川敦子、古谷野 亘

京都

<信徒奉事者認可>

2009年11月1日付 (任期1年)

(富山聖マリア教会)

ピリポ廣瀬康夫

■訂正とお詫び 『2010年度 教会暦・日課表』 p.5 2010年1月10日 顕現後第1主日・主イエス洗礼の日 詩編 誤) 86：19-29 → 正) 89：19-29
 以上の間違いがありました。訂正して、お詫びいたします。

シンポジウム「東アジアの平和と聖公会の役割」(再録)

～フィリピン、韓国、沖縄の視点から～

〈発題①〉

韓半島平和統一と東北アジアの平和
に向けたTOPIKの活動と課題パウロ 金根祥(キムグンサン) 主教
(ソウル教区、TOPIK委員長)

私たちが使っている「평화(平和)」という言葉をどのように理解しているかにより平和に対する私たちの生き方が決められる。実に「平和」については多様な観点と解釈がある。英語圏では平和を「Peace」と呼ぶ。ヘブライ語は「シャロム(Shalom)」と呼ぶ。私たちの漢字文化圏ではピョンファ(平和の韓国語読み)を「平和」と表記する。漢字文化圏で表記する平和の意味は、とても明確だ。「平」の字は平等や均等の意味を持つ。「和」の字は「米」を意味する「禾」に食を意味する「口」の合成語だ。したがって漢字文化圏で使う平和の意味は「一緒に米を平等に食べ分けること」を意味する。一緒に座り合って飯を分かち合う食卓共同体を意味する。このような意味は、非常に明らかで明快だ。

イエスは私たちをご自分の弟子として召され、この世界の平和の使徒になれと命じられた。イエスがこの世に来られた当時や今でも、相変わらず反平和的な社会秩序が支配している。特に、大韓聖公会が置かれている韓半島は、外勢による南北分断と同族で骨肉相食んだ経験で相互葛藤と反目、そして敵対感が広まっている地域だ。このような地域で神の民と

呼ばれている私たちキリスト者こそ、平和を待ち望んで、平和実現のために努めることは当然のことだ。

大韓聖公会は去る2007年11月に世界聖公会の協力事業として、通称「TOPIK 2007」と呼ばれる「世界聖公会平和大会・ソウル2007」をソウルと金剛山(クムガンサン)とで開催した。全世界14ヶ国から41人の海外参加者が参加した。特にこの時に日本聖公会を代表して植松首座主教をはじめとして多くの聖職と信者が参加してくれた。この大会は、このような日本聖公会の積極的な関心と支援なしには不可能だっただろう。共に祈り、力添えいただいた日本聖公会関係者の方々に感謝申し上げたい。

平和大会の参加者たちは、韓半島の反平和的な現実を再確認して、韓半島と東北アジアの平和のために共に努力することを決議した。この決議に基づき、平和大会の後続的活動の責任を担う機構として「TOPIK」という組織が作られた。英文では「TOwards Peace In Korea」という意味だ。誠に感謝すべきは、全世界聖公会の熱い支持を受けているということだ。昨年度のランベス主教会議でも韓半島の分断状況に深い理解を示し、平和統一への努力に共に取り組むという意志を表明してくれた。また日本聖公会は昨年度の総会決議を通して満場一致でTOPIK活動を支持し協力する決議を明らかにしてくれた。他にも米国聖公会のERD(Episcopal Relief & Development)、オーストラリア聖公会の宣教部(ABM, Australian Board of Mission)が積極的に協力している。

「TOPIK」は最優先的に対北朝鮮支援団体と協力して、「対北朝鮮人道的支援事業」を展開している。とても小さい試みだが、私たちはこれこそイエスの五つのパンと二匹の魚の奇跡を生み出す働きかけであると見なしている。2007年度の平和大会当時、水害によって困難にあっていた北朝鮮住民にセメントと医薬品を支援した。2008年度には米28トンと煉炭10万個を支援した。今年は昨年引き続き煉炭を継続的に支援しており、妊産婦のために牛乳送りキャンペーンを展開している。このような支援は、四旬節期間の信徒の皆さんが克己して集めた献金から支えられ、さらにはERDやABMのご協力で成り立っている。今年は日本聖公会も煉炭支援キャンペーンに参加してくれており、去る6月に11万円の煉炭送りキャンペーンのための献金を送ってくれた。この場を借りて募金に参加してくれた方々にお礼を申し上げたい。

言論を通じてニュースに接した方々はよくお分かりだろうが、北朝鮮の住民の生活実状は非常に困窮している。平壤を中心に配給体系が維持される所は比較的に好状況だろうが、周辺部に居住する住民たちの経済的な条件は非常に劣悪だ。最近の情報によると一家族への配給量が穀物180グラムという話を聞いた。180グラムというのは、さつまいも一個分にも及ばない量だ。食糧問題だけ深刻なのではない。北朝鮮は深刻な燃料難を体験している。北朝鮮を訪ねてみた人には分かるだろうが、山に木がないことが目立つ。これは燃料不足のため木を切って使った結果だという。こういう状況なら寒い冬場の北朝鮮住民の生活はいったいどのようなものだろうか。想像してみなくても彼らの苦難を十分に察してあまりあるだろう。

一部ではこのような対北朝鮮支援事業について否定的な見解を表わしている。北朝鮮の核開発問題と北朝鮮国内の人権問題、または拉致問題をあげて、私たちが取り組んでいる対北朝鮮支援事業が悪用されていると指摘する。し

かし、私たちの取り組みは人道主義的次元での支援なのだ。何かを条件にかけて支援するものではない。劣悪な環境に置かれた北朝鮮住民に私たちの愛を伝える分かち合いの働きである。イエスが今この瞬間に私たちとともにおられるとしたら、どのようになさるだろうか。現在のように南北関係が悪化している状況で神様が選択する道は何だろうか。世間の政治勢力にとってできないことは、いつも私たちのキリスト者の役割だった。

TOPIKのもう一つの課題は「平和教育」だ。1950年代の朝鮮戦争により南と北の人々の胸中には洗えない大きい傷が残された。お互いの怒りと敵対心、あるいは無関心が私たちに支配している。このような事情は、教会の中でも同じである。神様は私たちが平和の使徒として呼ばれた。平和の使徒たるものが集う所に怒りと敵対心、そして無関心があるということは、話にならないではないか！聖職者はもちろん信者に向けて平和教育プログラムを開発して、平和感受性を鼓吹させようと努力している。特にこの地の未来を背負う青年たちを対象に平和教育を実施している。すでに昨年大韓聖公会の青年たちを対象に「平和学校」を営んできている。今年8月には日韓青年セミナーをDMZの休戦線近くの地域で平和教育を中心に行った。TOPIKは宗教間の葛藤にも関心を持っている。したがって今後展開する平和教育は、イスラムとキリスト教の問題あるいは仏教とキリスト教の問題を解きほぐす内容を取り扱うことになる。

また、TOPIKは「世界聖公会の継続的な協力」を引き出すために努力している。韓半島分断の問題はアジアの平和秩序造成において核心になる。南と北の分断は周辺国家の政治的な力関係で形成された政治的遺産であるからだ。韓半島の分断が韓半島に住む人々の意志とは関係なくもたらされたように、韓半島の平和統一のためには東北アジア関連諸国の協

力が必須だ。このためTOPIKは対外的に広報渉外活動を多様に展開している。

昨年7月のラムベス会議では「平和プロジェクト」というタイトルでTOPIK活動を広く知れ渡らせて世界聖公会の協力を引き出した。40人余のソウル教区オモニ（婦人会）聖歌隊による公式的な平和コンサートを開催し、TOPIKセクションを設けて、多くの主教らの共感を引き出した。また韓半島統一と東北アジアの平和を意向とした感謝聖餐式をささげた。特にこの礼拝で日韓の和解のための祈りを植松首座主教が捧げてくださったことは、世界聖公会の注目を浴びることとなった。より一層有意義だったことは、この平和プロジェクトをTOPIKと日本聖公会の正義と平和委員会が共同で企画して推し進めたという点だ。これを契機に、全世界聖公会はもちろん私たち大韓聖公会も、日本聖公会が取り組んでいる平和憲法9条プロジェクトが東北アジアの平和において大変重要な懸案であるという点を認識するようになった。

窮極的にTOPIKは東北アジアの平和のための「東北アジア平和ネットワーク」を立ち上げたいと願っている。東北アジアの平和のために各地域の葛藤問題と共通の懸案を持続的に共に議論できる枠組みを作りたいのだ。韓半島の分断問題、日本の平和憲法問題、気候変動をはじめとする環境問題、そしてアジアの貧困問題に至るまで東北アジアに温存されている反平和的現実を共に熟考し、共に祈りつつその代案を模索する常設化された機構が作られることを望んでいる。このために、去る1月、私のソウル教区主教就任式の際に来韓した日本、香港、米国の代表らと共に第1次準備会を開き、意見を交わして共感を確認した。そして3月に香港で第2次準備会を行った。この2回目のミーティングの結果、東北アジア平和ネットワークを今直ちに作るより、第2回世界平和大会を準備する準備委員会を結成して、斬新的にネットワークを具体化していくことに意見が集めら

れた。

繰り返し強調しても足りないことだが、韓半島の統一と東北アジアの平和という主題は、アジアに身を置いている私たちの最優先的な宣教課題であることに何の疑いもない。このため私たちは謙虚な姿勢で神様のみ助けを切に求めている。共に力を合せて善を行えという神様のお言葉のように、最も近くにある韓国と日本がより一層協力することを願い祈る。韓半島平和統一と東北アジアの平和という私たちの最優先的かつ共通の宣教課題のために、互いに折りあい、一層協力するならば、神様の驚くべき恵みが私たちの上に常に共にあることと信じている。

最後に「日本聖公会主教会教書」に対する私の意見を付け加えておきたい。まず、日本聖公会の宣教150周年を改めて心からお祝い申し上げたい。そして「深い海に漕ぎ出して、網を降ろしなさい」というイエスのお言葉を手にして、150周年とこれからの宣教ビジョンを見出して誓う日本聖公会の新たなチャレンジに深い賛辞を送りたい。

日本聖公会は、小さい共同体であると自ら告白しているが、平和と和解に向かった宣教的努力に誠意を尽くして実践している教会という点で、すべての教会の模範となる。日本聖公会の過去の歴史がこれを証明する。特に私たちの大韓聖公会との関係において、過去の植民地支配の歴史に対する反省と謝罪を通じて、イエス・キリストに在る兄弟姉妹であることを確認しようと努力した点は、日本聖公会の信仰的基盤と神学的土台を物語っている。主教会教書にも言及されているように、日本聖公会と大韓聖公会は過去25年間、相互理解と協力のために努力してきた。その結果、毎年日韓の青年の交流が定期的に行われており、現在十数名の韓国人司祭が日本の教会で仕えている。私の主教按手式に日本聖公会のすべての主教様が参加されたことだけでも両国教会がどれくらい近いの

かが分かる。過去植民地支配という痛恨の歴史を持っている私たちが日本聖公会とこのように多くの交流を交えられたことは、日本聖公会の歴史への反省と和解への努力があつてこそ可能だった。その交わりのプロセス中にいた一聖職として、もう一度日本聖公会の信仰告白に対して、心をこめて感謝の気持ちをお伝えしたい。

また最近では、近隣の東北アジアの平和のために努力している姿を何とも美しく思う。日本の軍国主義復活に反対して平和憲法第9条の問題に取り組んでいる姿が美しく、韓半島の平和統一のために共に祈って協力している姿が、誠に美しい。このような努力を美しいと表現した理由は、日本社会でも、韓国社会でも教会が抱えている当面の課題の前で、いとも簡単に次の順位に押されたり忘れがちな平和と和解への宣教的情熱を逃さず握っているからだ。韓国の教会も信徒の減少、会衆全体の高齢化など、緊急な当面課題を抱えている。さらには、日本と同じように韓国社会も様々な理由で保守化が進んでいる。しかし、教会内部の諸問題も、社会の異常な気流も神の宣教のための私たちの取り組みをためらわせることはできない。今私たちに必要な信仰は、今やらなければならないことを後回しにしてはいけないということだ。もっと力を合わせて、私たちの宣教の情熱が東北アジアを越えて、アジア全体の貧困と抑圧、そして踏みにじられた人権を回復するために捧げられることを願い祈る。

私は日本聖公会を信じる。150周年の主題聖句が私を安心させてくれる。「深いところに行って網を降ろして魚を取りなさい」。果たして「深いところ」はどこであろうか。そんなにやさしくはない道、イエスの歩んだ道、十字架の道、復活の道ではないだろうか。揺さぶられないで教会の本来の任務を探し出して、黙々と険しい道を拒まずに漕ぎ出していく日本聖公会の姿を見て、兄弟共同体の一股体として、限らない自負心を持たされる。日本聖公会よ、恐れるな!皆さんを

孤独にはしておきません。これからの大変な道を、拒まないで、一緒に、共に行きましょう。

〈発題②〉

東アジアの平和

フィリピン北中央教区

主教ジョエル・A・パチャオ

山岳地帯における戦争と平和の状況

北部フィリピンのコルディエラ山脈の山岳地帯に、カプヤとグバトという先住民の村がある。双方の村とも自動車による交通はなく、お互いに歩いて1時間は離れており、高山と、深い峡谷を流れる美しく冷たい急流によって隔られている。この急流はやがて下流の大きな川に合流する。カプヤにたどり着くには、山脈の中を曲がりくねって通っている唯一の道路を離れ、そこから1時間少々、細く険しい山道を登らなければならない。グバトに行くには、同じ道を数キロ下ったところで離れ、ほぼ2時間を歩かなければならない。

カプヤとグバトは、明確に区分された村域をもっているが、その中間にある山岳地帯は広い共有地で、お互いの村民は自由に狩猟し、燃料用の薪やその他の森の産物を採集している。川もまた、共有の漁場で、さらに重要なことには、それぞれの村の近くの山の中腹にある棚田の共通の灌漑水源なのである。

地域の他の村落に比較して、カプヤとグバトは貧しいが、過去長い間、双方の村の人々はある程度豊かに暮らしてきた。現在でも、雨期が終わりに近づくと水田は徐々に緑から黄金色に変わり、重い穂を付けた稲が頭を垂れてくる。何年もそうだった。間もなく米は収穫の時期を迎え、豆のような換金作物が植えられる。換金作物と森林産物からの収入に加えて、季節労働に従事したり、小規模な野菜や果物の商売のために近隣の都会に出かける人々もいる。

カプヤとグバトにおける相対的な豊かさが何年間かは続いてきたという目に見える徴がある。かやぶきの屋根は今は輝くGIルーフになっている。伝統的な木造家屋の中には、コンクリートの柱とブロック壁の構造に変わっているものもある。電力は送電されていないが、電池で動くラジオは地元の商店で入手することができ、華やかな音楽やニュースや大衆演劇が流れている。長年にわたって比較的豊かであったため、カプヤとグバトの青少年は付近の都会の高校や大学に通うことができる。

しかし、この豊かさは脅かされている。皮肉なことに、お互いに近くにあるにも関わらず、この二つの村は伝統的に敵同士で、過去何度か部族紛争を経験している。今また、二つの村の緊張関係が感じられ始めている。イノシシや鹿、鳥類の数が減少しているため、狩猟は以前ほどうまくいかない。狩猟に出かけた人々はしばしば手ぶらで帰ってくる。大切な森林の産物も枯渇している。双方の村は、獲物の少なさや薪や材木その他の森林産物の減少をお互いのせいにし、引き続きこれらの資源を競い合って消費している。

もっと深刻なのは、河川流域の放置と砂漠化によって、川に流れ込む水量が減少し、他方では新しい水田や棚田の開発で灌漑用水の需要は増加しているということである。双方の村は、他方を犠牲にして、自分の方により多くの水資源を引っ張ろうとしてきた。そのために、二つの村の紛争は激化した。最近では脅迫が横行し、「ボロス」と呼ばれるマチューテ（山刀）が抜かれたこともある。その結果、緊張が高まっている。

二つの村を覆っていた平穏さは失われ、村人たちは不安を感じている。高齢者の多くは、二つの村が暴力的で死者を出す部族紛争を引き起こしてから一世代も経たないということを記憶している。その悲劇的な出来事の記憶によって、互いに首狩り隊が襲撃しあったというおぞましい思い出が蘇っている。彼らは多くの死者が出た事件の記憶をもっている。堪え忍ばな

ければならなかった困難を覚えている。首狩り隊の犠牲になることを恐れて、村人たちは「ウマ」と呼ばれる開墾された森の土地（ここでは、豆やサツマイモ、コーヒー、トウモロコシが栽培されている）に敢えて行こうとはしない。彼らは、村に近い水田でしか働かなくなっている。その結果、多くの水田が放棄されているのである。狩猟と食料採集も止められている。村の中の生産が急速に減少する中で、外部からの補助的収入もなくなっている。だれも、村の安全を放棄したくはないからである。これらのことは多くの村人たちにとって飢餓を意味しているのだ。

カプヤとグバトの人々はまた、ボロス（山刀）と槍を研ぐのに時間を費やした時代を覚えている。鉄の鋤やその他の農具さえ溶かされて槍の穂先や斧に造りかえられた。夜も寝られず、村の周囲を警戒する孤独な日々が続いた。それを覚えている人々は、ため息をついてその思い出を語りはじめ、集まってくる人々の数も増え、不安な空気もましている。

『山岳地帯に平和を』

「山岳地帯に平和を」というのは、フィリピン北部教区のモットーになっている。それは、祈りであり、平和を創り出す行動でもある。その証しは、最近のカプヤとグバトの紛争の際に示された。州政府の援助と、教会の仲介によって、その紛争は終結し、二つの村の間に講和条約が締結された。しかし、平和の回復は生やさしい仕事ではなかった。双方の村の部族の指導者たちと個別に会い、暫定的な休戦のための条件を整えるには時間がかかった。多くの場合、双方の村は引き下がって獲得した条件を放棄することを拒絶した。部族の指導者たちが直接顔と顔を付き合わせて会うには、さらに何ヶ月もの話し合いと仲介が必要であった。こうした努力の中で、教会は、平和を説くだけでなく、実際に平和のために行動を起こし、右にも左にも逸れなかった。よく言われているように、「平和について語るだけでは十分でない。平和を信じなければならない。そして平和を信

じるだけでは十分でない。平和のために働かなければならない。」のである。ほぼ一年にわたる暴力と恐怖と死の後、ついに平和が成し遂げられた。

もしも新たな紛争が起これば、それは必ず、いっそう暴力的で、双方にいっそう多くの死者を出すことになるだろう。以前はボロスと槍と斧が武器であったが、今では銃と火器が双方の村で手に入る。従来の武器は敵との接近を必要としたが、新しい武器は遠くから発射することができる。これらの新しい武器に頼ろうとしている村人が増えており、恐怖と不安が確信に変わっている。

これまでカプヤとグバトが経験し、また現在のもめ事が解決されなければ再発するかも知れない紛争のような部族紛争は、コルディエラ山脈のさまざまな部族の間でしばしば起きている。これらの紛争の原因は多様である。それらの解決への取り組みにおいて、教会は信頼できる仲介者である。何年にもわたって平和（それとともに村落の発展）を促進し、守り、追求してきたことは、フィリピン聖公会のミニストリーのしるしである。

先月、フィリピン聖公会執行評議会は、「ロバート・ロンギド主教平和賞」を創設した。どのような形で賞が贈られるかははっきりと決められておらず、受賞者の選考基準もこれから決定されるが、その主旨は、平和の促進と擁護、追求というミニストリーに携わった教会の信徒を表彰することである。この賞はまた、その名前のもとになったロバート・ロンギド主教を記念するためでもある。司祭としてまた主教として、彼のミニストリーにはコルディエラ山岳地帯における平和の構築に向けたたゆまぬ努力が含まれていた。彼はまた、フィリピンにおける平和をもたらしするためのエキューメンカルな努力にも深く関わっていた。とくに、民族民主戦線（NDF）とその軍事部隊である新人民軍（NPA）を一方とし、フィリピン政府およびその軍隊を他方とする長期の紛争における和平努力に関わっていた。ロンギド主教の平和の努力は、フィリ

ン聖公会の平和ミニストリーを体現するものであった。

東アジアではどうか

あまりにも単純すぎるように聞こえるかも知れないが、部族間の紛争であれ、国と国の紛争や戦争であれ、あらゆる紛争はよく似た原因に基づいていると私には思われる。それらは、領土や民族的プライド（ナショナリズム?）、競合する重要資源の奪い合いなどから起こるのである。結果として生じる暴力や死、戦争に向けられる資源、混乱は、いずれの場合にも同様に破滅的である。しかし、もっとも破滅的なのは、世界の超大国の間でのイデオロギー的・経済的争奪における「代理戦争」として役立つ、同じ地域における諸国内、あるいは諸国家間の紛争である。この地域における過去の紛争は、アメリカを一方とし、中国およびソ連を他方にした紛争であった。不幸なことに、東アジア諸国は自ら、超大国の争奪外交政策のコマになることを自らよとしたのである。

私は、フィリピンにかつて存在した米軍基地がフィリピンを守るためにあったと信じたことは一瞬とてなかつた。米軍基地は、アメリカの軍事力を防衛し、東アジアにおけるアメリカの権益を守るために存在したのだ。これは、東アジアにおけるその他の米軍基地についても同様である。

また、こう言うのは政治的に無邪気であり、歴史的な無知であるかも知れないが、部族間であれ国際的なものであれ、平和には同じく報奨があると思う。それは、時間と資源の生産的な使用であり、人々と物資の自由な移動であり、結果として生じる安全保障と繁栄である。おそらく唯一の違いは、その規模と大きさであろう。

東アジアとは狭義には、日本、中国、北朝鮮、韓国、モンゴル、および台湾である。それらは併せて1200万平方キロメートルの面積と、およそ16億の人口をもっている。東南アジアをも含めると、さらに11カ国が加わり、面積は1650万平方キロメートル、人口は20億を少し超える。

これは、世界人口のおよそ3分の1に当たる。

過去数十年間は疑いもなく、この地域における生産性の時代であった。概算によれば、世界のGDPと貿易額の20パーセントをこの地域が占める。この生産性と容易な貿易によって、比較的な繁栄がもたらされた。この驚異的な経済成長を支えた大きな要因の一つが、長年にわたってこの地域で支配的であった平和と安定であった。

しかし、東アジアにおける平和と安定に対する潜在的脅威は、完全に解決され取り除かれた訳ではない。朝鮮半島（韓半島）は分断されたままであり、統一への意志がある。これは最近の北朝鮮による核実験とロケット発射によって浮き彫りにされた。これらの事件は、韓国だけでなく東アジアと世界の他の国々でも大きな憂慮を呼び起こした。中華人民共和国と台湾（中華民国）の間の緊張もある。第二次世界大戦における苦い記憶による日本と周辺諸国との未解決の諸問題も存在している。そして、台頭しつつある超大国・中国と、再起したロシア、そしてアメリカとその同盟国との間のイデオロギーの対立は、引き続き東アジアにおける今後の出来事に影響を与え続けるだろうと確信している。

『平和をつくり出すものは幸いである』

東アジアにおけるキリスト教会は非常に小さな存在である。教会はこの地域における諸国の事柄にあまり影響を与えられないことがしばしばである。そして、キリスト者は地域の総人口の中では非常に少数である。聖公会ということになるとさらに少ない。しかし、われわれは、この地域における平和と安定、安全を促進し擁護し、そのために働く上で、他の地域における教会と同様の関わりをもっている。われわれが少数派であるということは、決してこの地域における「平和の声」であるべきだというわれわれの義務を否定するものではない。しかしそうするには、われわれは地域の他のキリスト教会とのエキューメンカルな協力と、平和への願望を共有する他の信仰共同体との協力が必要なので

ある。

平和のために祈り、平和を促進し、擁護し、そのために働くことは、われわれがキリスト者であることの一部である。主イエスは「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」と言われた。平和のために祈ることは、われわれ自身を平和を実現する者として差し出すことである。そして、イエスがわれわれを平和の作り手として祝福されるとき、彼はわれわれを平和のための能動的な働き手としての任務へ派遣しているのである。平和の担い手としての派遣は、聖公会の信徒一人ひとりが召されているミニストリーである。それは、この地域のすべての聖公会管区のミニストリーである。カプヤヤグバトという小さな村であれ、もっと大きな東アジアの地域であれ、「教会が平和について語るだけでは十分でない。われわれは平和を信じなければならない。そして教会が平和を信じるだけでは十分でない。われわれは平和のために働かなければならない。」

終わりに、ある老人の平和に対する熱望を詩にして紹介したい。

「茶碗に米があるように、平和をもたせよう。

魚と鳥があるように、平和をもたせよう。

われわれが自由であるために、平和をもたせよう。

神の栄光を見るために、平和をもたせよう。アーメン」

〈発題③〉

「東アジアの平和と聖公会の役割

～フィリピン、韓国、沖縄の視点から～

日本聖公会沖縄教区 主教 谷 昌二

初めに、カントの「永遠の平和のために」からの言葉を紹介させていただきます。

「将来の戦争を見こして結んだ平和条約は、平和条約ではない」

「平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしている」

「戦争を起こさないための国家連合こそ、国家の自由とも一致する唯一の法的状態である」

「平和条約は一つの戦争を終わらせるだけであるが、平和連合は、あらゆる戦争を永遠に終わらせることをめざしている」

「常備軍はいずれ、いっさい廃止されるべきである」

「隣り合った人々が平和に暮らしているのは、人間にとってじつは『自然な状態』ではない。戦争状態、つまり敵意がむき出しというのではないが、いつも敵意で脅かされているのが『自然な状態』である。だからこそ平和状態を根づかせなくてはならない。」

沖繩の視点から、「東アジアの平和」について何が見えて来るのか、そして、日本聖公会としてどんな役割が取れるのか、発題させていただきます。

初めに、日本聖公会宣教150周年を迎え、世界各地からたくさんの兄弟姉妹をお招きして、お祝いの時を持つことが出来ることを、神に感謝します。又、お越しくくださった皆様に心から感謝いたします。宣教150年とは言いますが、沖繩にはその16年前に、イギリスから宣教師ベッテルハイムが派遣されて、8年間那覇で熱心に福音伝道をしておりました。残念ながら、その後継者が続かず、聖公会としての組織的な宣教へとつながりませんでした。ベッテルハイムは、沖繩を日本本土への宣教の拠点と考えていたことだけは確かであります。

東アジアの平和を考える時にも、沖繩は非常に大事な位置を占めています。地図を御覧ください。沖繩は、フィリピンのマニラを含めて、アジアの重要都市の真ん中に位置しています。結論を先に言えば、東アジアの共通の安全保障を結ぶ拠点として、将来、沖繩の果たす役割が、とても大きいものがあると信じます。

ただし現在の沖繩は、それとは全く別であります。強力な米軍基地が沖繩本島の4分の1を占めています。地図を参照ください。この沖繩の基地が、第二次世界大戦後、数々の戦争の拠点として使われてきました。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、そして、アフガニスタン、イラクへの攻撃の基地として、今も、戦闘機が、沖繩から飛び立っています。日本全体にある米軍基地の75パーセントが沖繩にあります。どうして、こんな小さな島、日本全体の面積の0.6パーセントに過ぎない沖繩に、75パーセントの米軍基地が集中的に存在するのか。その理由は、日本の敗戦後の歴史から見えてきます。

1945年4月1日、米軍は沖繩に上陸、激しい地上戦の後、沖繩を完全に制圧し、占領政策を始めます。6月23日、沖繩での組織的な戦闘は終わりました。そして、米軍は、沖繩を日本本土への空爆の基地として利用。8月15日、日本はポツダム宣言を受諾、無条件降伏し敗戦の日を迎えます。

当初、アメリカは沖繩を日本の帝国主義によって支配された異民族であると認識して、国際連合による信託統治期間を設けた上で、日本から分離独立させる計画をしていました。ところが、ソ連を中心とした共産主義諸国との対決が強く意識されてきたのです。もし、信託統治にすると、軍用地の接収が出来なくなる。さらに、国連へ毎年、統治の実態報告が義務付けられていますから、米軍の思うようには使えない。それで、沖繩独立を前提にした信託統治を取り下げて、日本の潜在的な主権を認めつつ、アメリカ軍による統治の形態にしたのです。

1951年のサンフランシスコ平和条約で、沖繩が完全に本土から分離され、日本政府の承認のもとに、アメリカ軍は、沖繩で基地を思いのままに拡大・利用できることになりました。この沖繩の本土からの分離にいたる過程で、もう一つ大事なことがあります。

それは、日本国憲法の第9条、戦争放棄・戦力不保持の決断との関連で、沖繩分離が重要な役割を担っていたということです。戦後、日

本の占領政策に当たった連合軍最高司令官総司令部(GHQ)は、アメリカの強い指導力のもとにありました。アメリカは、ソ連を中心にした共産圏に強い脅威を抱いていたから、日本を一日も早く自立・独立させ、自由陣営の中に入れて、反共の砦としての役割を担わせたかったわけです。そのためにまず、新しい憲法を早急に作り上げる必要がありました。アメリカは日本の再生のためには、天皇制を残すことが必要と考えていました。しかし、天皇制を残した場合、日本が侵略したアジア諸国から強い反発を受ける。そこで、天皇制は残すが、非武装・非軍事国家となるなら他国への説得もできる。この戦争放棄には、単にGHQの目論見だけではなく、日本側からの強い意志、戦争はもうごめんだという意志があったことが明らかにされています。ここに日本とGHQ、特にアメリカの思惑が一致して憲法9条戦争放棄の条項ができました。

が、それでは、東アジアの安全保障をどうするか、これが問題です。その役割を担わされたのが沖縄です。日本本土は、天皇制と非武装の国家とする。その時、沖縄を本土から切り離し、強力な米軍事基地にする。こうして、新しい憲法が、敗戦後の翌年の1946年11月3日に公布され、1947年5月3日に施行されました。アメリカはGHQの中に「極東委員会」が作られる前に憲法を作り上げるよう急き立てたと言われています。「極東委員会」でこの憲法への反対意見が、各国から出されるのを封じ込めたわけです。この時作られた沖縄の分断・軍事基地化の悲劇が、今日に至るまで引き継がれて来たことを理解していただきたいのです。

「銃剣とブルドーザー」で、沖縄の住民から土地を奪って基地がどんどん拡張されて行きました。軍事基地を取り巻く環境によってお金がどんどん落とされ、沖縄はそれまでの貧しさから一挙に豊かになって行く半面、飛行機の墜落、騒音、そして婦女子への暴行、窃盗、殺人など、基地によって多大の被害を蒙って来ました。1972年、沖縄の施政権は日本に返還され、本

土に復帰しますが、事態は全く変わらないまま推移しています。むしろ、日本政府が積極的に予算を付けて基地建設、施設維持の100パーセントを税金で賄い、基地の中の借地代を最近になってどんどん値上げし、又、色んな形で地方自治体に莫大な補助金を出して、人々を金縛りにしています。危険な普天間基地の移設を理由に、今、辺野古において素晴らしいさんご礁を壊して、新しい基地を作ろうとしています。おじい、おばあが命を張って反対しています。

さて、この沖縄から見えて来るものは何か？ 私は、11年前に本土から来たものですが、沖縄に来てははっきりと見えたものは、それは、世界は今も戦争の真っ最中にあるということです。これが、日本本土ではほとんど見えない。いや見ようともしてこなかったのです。

私たち日本聖公会は、宣教150周年を迎えるにあたって、主教会教書を出しました。その中で、戦争へと突き進んでいく日本の状況に、イエス・キリストの福音をもってはっきりと反戦の意思表示が出来なかったことを、神の前に認め、懺悔し、そのことを覚え続けていくことを誓っています。“ウィリアムズ主教の上陸から約50年後、1910年の「日韓併合」に象徴されるように、その後の日本は軍国主義国家に向けて突き進んでいきました。圧倒的な時代の流れの中ではありましたが、教会は国家の戦争、特にアジア諸国への日本の侵略、植民地化に対して、キリスト教の信仰、福音に基づいた明確な理解や姿勢を持って発言することが出来ずに来た歴史を覚えつづけなければなりません。”これに先立って、1996年の総会で「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を承認しています。

ただ、これらの日本聖公会としての上からの公式見解が、どこまで教会のレベル、又、信徒一人ひとりのレベルにまで届いているのか、共有されているのか、厳しい状態です。教会での関心が、一人ひとりの信仰、特に内面的なところに絞られ、又、教会の信徒が減少している中で、教勢をいかに回復するかが緊急課題で、なかなか教会の歴史的役割、あるいは現在の社

会・政治問題に積極的に関わることの難しさがあると思います。

今、私たちは激動の時を迎えています。100年に一度と言われる世界経済大恐慌は、各国政府の努力にも拘わらず、収まる気配を見せません。この厳しい経済情勢の中で、わが国の政治、世界の政治もまた、大きな転換期を迎えています。世界の政治と経済を支配してきたアメリカの覇権の時代は終わりました。アメリカのドルとアメリカの強力な軍事力で何でも出来た時代は、確かに終わりを迎えています。日本政府は、これまでアメリカ覇権の路線をそのまま走ってきました。が、これからは全く未知数です。

世界は、すでに地域ごとの連帯と「共通の安全保障」に向かって動き出しています。EU・ヨーロッパ連合を初め、南アメリカ諸国連合が2004年に発足し、2010年には、アメリカ・カナダ抜きで、中央アメリカ、カリブ海諸国が加わって中南米カリブ連合が結成されようとしています。アフリカ諸国でも連合の動きがあります。東南アジアではアセアンが早くから動き出していました。残念ながら、東北アジアでは、未だにこの動きが見られません。日本のアメリカ一辺倒の姿勢、朝鮮半島の分断、台湾と中華人民共和国との関係など、大変な障害がありますが、たとえどんなに困難であっても、東北アジアの共通の安全保障に向かって歩んで行かなければならない時が、確実に来ていると思います。

その時、一番有効に用いられるのが、日本の平和憲法だと信じます。日本の平和憲法は、日米安保条約によって完全に骨抜きにされていますが、アメリカの覇権が終わり、中国がすごい勢いで世界の表舞台に登場して来たこの時、今がチャンスです。日本は、東北アジアの共通の平和・安全保障を担う責任があります。今こそ、過去の戦争責任をしっかりと認めて、軍事によらない各国との連合を築き上げていく指導的役割を果たす責任があると思います。平和憲法は、第9条戦争放棄・非武装が有名ですが、そ

れ以上に、人権を尊重し、貧困を克服するため互いに助け合う人間の安全保障が、より豊かに謳われています。武力によらない平和の道を、イエス・キリストにある信仰をもって歩みだす。各国の信仰者と共に歩む。これができるのが、聖公会につながる私たちの共同体です。日本聖公会は、韓国、台湾、フィリピン聖公会と力を合わせて、この目標に向かって進んで行きたいと思ひますし、その基地として、長い痛みを担ってきた沖縄が用いられることを期待します。

◆シンポジウムの総括

明確になった東アジアの 宣教課題

シンポジウム担当 司祭 野村 潔

9月22日(火)、立教大学にて開催された日本聖公会宣教150周年記念プログラム(以下「記念プログラム」)のひとつとしてシンポジウムが行なわれました。このシンポジウムの計画は、今年1月、大韓聖公会ソウル教区の金根祥新主教の就任式の際に行なわれた日韓協働プロジェクト会議において、ソウル側からなされたチャレンジに端を発しています。日韓聖公会の公式交流が始まってから今年で25年目になりますが、宣教150周年記念礼拝(以下「記念礼拝」)を行なう際に、これまでの日韓両聖公会の協働及び友好関係をどのように表現するつもりかという問いかけが大韓聖公会からなされたのです。大韓聖公会からは、オモニ聖歌隊をはじめ、多数の信徒・教役者を記念礼拝に参加させる意向が示されました。それは、とりもなおさず大韓聖公会が日本聖公会の記念礼拝への協力と協働を強く望んでいることの意志の表明でもありました。

この要請を真剣に受けとめて、関係者が協議し、記念プログラムを開催することになりました。

た。その際に日韓両聖公会の協働の成果と視点に基づいた、宣教150周年にふさわしいメッセージを込めたプログラムが必要とのことで計画されたのが、このシンポジウムでした。

シンポジウムのテーマを「東アジアの平和と聖公会の役割」としましたが、この5年間、日韓聖公会が掲げてきた「東アジアの平和」というテーマを、単に日韓の二国間だけではなく、もう少し広く東アジア全体における平和という視点から考えようということで、日韓両国とも関係の深いフィリピンも加え、日本、韓国、フィリピンの聖公会を代表して、3名の主教からメッセージをいただくことにいたしました。

シンポジウムの冒頭、植松首座主教が挨拶に立たれました。植松主教は1995年の宣教協議会にて、日本によるアジア諸国への軍事侵略に対して、日本聖公会が平和の器としての役割を果たせなかったことを確認したこと、それによって翌年の日本聖公会総会にて、日本聖公会の戦争責任について謝罪したことなどに触れ、それ故、新たに「和解と平和の器」として歩むことが日本聖公会の宣教の課題であることを明言し、このシンポジウムへの期待を述べられました。

最初の発題者はソウル教区の金根祥主教でした。金主教は、2007年11月にソウル及び北朝鮮金剛山にて開催された「世界聖公会平和大会・ソウル2007」の報告をしつつ、この大会をきっかけに、韓半島と東北アジアの平和の実現に取り組むため、「TOPIK (Towards Peace in Korea)」という機構が設立されたこと、そして日本聖公会をはじめアメリカ、オーストラリアなどの協力によって、この働きを進めようとしていることを意欲的に語られました。具体的には、「対北朝鮮人道的支援事業」や「平和教育」などを考えており、北朝鮮への支援としては、すでに米、練炭、医薬品などが北朝鮮の住民に送られていることが報告されました。今後の課題としては「東北アジア平和ネットワーク」を構築し、殊に日本聖公会との協働を大切にしながら、東北アジア全体の平和や貧困、環境などに

関する課題全般に取り組んでいきたいとの決意を示されました。

二番目の発題者は、フィリピン北中央教区のジョエル・パチャオ主教でした。彼は、フィリピンのルソン島北部のカプヤとグバトという二つの村の間で起こった部族間抗争を例にとり、この二つの村の抗争を終わらせるために果たした教会の役割の重要性を語りました。時間をかけ、忍耐強く、人々に関わることにより、二つの村に平和を取り戻すことができました。これがフィリピン聖公会のミニストリーなのです。これは狭い地域でのひとつの経験ですが、このような働きは、東アジアという広い地域においても、基本的には変わらないのです。東アジアにあって、聖公会は実に小さい存在ですが、私たちひとりひとりが平和の担い手として派遣されているのです。教会は、平和を信じるだけでなく、そのために働かなければならない存在であり、それが教会の使命であると語りました。

最後の発題者は沖縄教区の谷昌二主教でした。地理的にも東アジアの真ん中に位置している沖縄は、日本全体の米軍基地の75%が集中する軍事的な拠点でもあります。沖縄の歴史と現状から見ても、世界は今も戦争の真っ只中にあるということを実感します。一方、世界経済の不況により、アメリカ中心で進んできた世界が終わりを告げようとしている今、東アジアにおいては共通の安全保障を目標としていく時代が来ています。そのために日本の「平和憲法」の役割は重要です。「平和憲法」の精神に基づき、武力によらない平和の道を、日本聖公会は東アジアの聖公会と協力して築いていきたいと語りました。

以上、3名の主教の発題内容は、実に示唆に富んだ内容の濃いものでした。これらの発題ひとつひとつが、東アジアのすべての教会における、非常に重要な、今日の宣教課題を示しているように思います。

2時間という時間的な制約の中で、しかも3ヶ国語で語られたシンポジウムでしたので、発題内容をあらかじめ翻訳して、発題と同時に

2ヶ国語をスクリーンで映写するという方法をとりました。そのため、発題者には事前に完全原稿をお願いしました。多忙な主教さんたちにとっては、酷なお願ひでしたが、すばらしい内容の発題をしていただきました。主催者として心から感謝したいと思います。このシンポジウムにお集まりいただいた人数を正確には数えていませんが、500名収容の教室が予想以上に埋まりました。主催者発表400名といったところで

しょうか。

また、原稿の翻訳、発題者との連絡・調整、資料の作成、或いは当日の司会、通訳、機械操作など、このシンポジウムの実施のためにご協力いただいた全ての方々から感謝いたします。本当にありがとうございました。

記念プログラム「みんな集まれ！」の成果

管区宣教主事 司祭 武藤 謙一

日本聖公会宣教150周年記念礼拝の前日に、立教大学池袋キャンパスで行われた記念プログラムには、実行委員会の予想をはるかに上回る方々が参加していただき、改めて感謝申し上げます。

記念礼拝については2006年総会で決議され実行委員会がたてられましたが、記念プログラムについては今年2月に実行委員会が組織され準備が始まりました。そのきっかけは1月にソウルで行われた日韓協働合同会議の折に、大韓聖公会からこれまでの宣教協働の成果を示すようなプログラムを持つことなどはできないかという提案があったことです。25年にわたる公式な宣教協働をしてきた大韓聖公会が共に宣教150周年を祝いたいという意志表明としてこれを受け止めた日韓協働プロジェクトは、記念礼拝実行委員会にすぐにその可能性を打診しましたが、記念礼拝実行委員会は記念礼拝とレセプションを行うための委員会であるとのこと。そこで同委員会の了承を得て、また主教会の意向をも汲み取りながら記念プログラム実行委員会の設置を常議員会に諮り、大西 修主教を委員長として正式に発足しました。

国内でも青年たちから、この機会に全国青年大会のリユニオン開催の提案、女性やジェン

ダーに関わる人たちからの集まりを持ちたいとの提案、実現はしませんでした。全国教役者会開催の提案などもありました。会場に関しては立教大学が快く会場を提供していただき、さらに共催という形でご協力くださいました。心から感謝いたします。実行委員会は限られた時間の中で役割を分担し、それぞれさらに多くの方々の協力を得て一つひとつのプログラムが準備されていきました。

いま改めて振り返る時、これらのプログラムは聖霊降臨日に主教会が出された「日本聖公会宣教150周年記念 主教会教書」で示され、「日本聖公会宣教150周年記念特祷」で祈られていることを具体的な形で表していたものだったと言えるでしょう。コーンウォール・リー女史の展示や多数の教会や施設の写真からは、与えられた恵みの豊かさ覚えました。しかしその中に、朝鮮聖公会や台湾聖公会の写真があることには痛みを感じます。オモニ聖歌隊の歌声を聴ける喜び。50以上の教会や団体のブースや交流会では再会を喜ぶ笑い声が絶えませんでした。カンタベリー大主教と青年たちとの対話ではキリスト者としての在り方について示唆に富んだ応答があり、シンポジウムではこれからの日本聖公会の宣教の課題が、アジアの諸教会

との協働の中でなされていくことが示されました。愛と聖霊に満たされた夕の礼拝はそこに集まった人々に力を与えるものでした。

翌日の記念礼拝を含めてですが、記念プログラムを通して、わたしたちは150年の間に与えられた多くの恵みへの感謝の思い、主にある兄弟姉妹の交わりの喜びを、そしてわたしたちの教会が「平和と和解の御業の器として」これか

らも歩んでいこうという決意を分かち合ったのです。

*交流会ではチケットを購入していただきながら、飲食物が足りずにご迷惑をおかけした方々が多くありました。紙面を借りて心からお詫び申し上げます。



香港聖公会東九龍教区・徐 贊生主教からのプレゼント

日本聖公会宣教150周年記念礼拝に出席された香港聖公会の徐贊生主教がお贈りくださった書軸です。次のように記されています。

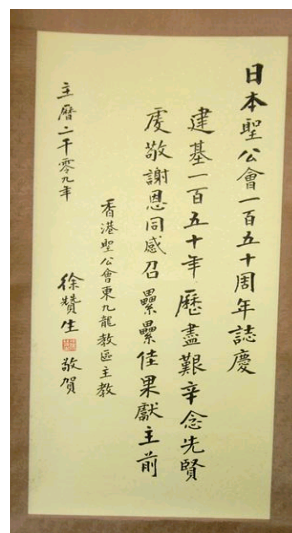
日本聖公會一百五十周年誌慶
 建基一百五十年 歷盡艱辛念先賢
 虔敬謝恩同感召 累累佳果獻主前
 香港聖公會東九龍教區主教
 主曆二千零九年 徐贊生 敬賀

これは七言絶句。初句、2句、4句の末尾「年」「賢」「前」が韻を踏んでいます。文中の語句の意について記しますと—、「建基」は、お寺などの開基に通じるのですが、基は「基督(キリスト)」「基督教(キリスト教)」の略と読み取れます。「歴盡」は、経験し尽くす・(苦勞を)なめつくす。「艱辛」は、艱苦・辛苦。「先賢」は、尊敬する先人・昔の賢人。「虔敬」は、恭しい・敬虔である。「累累」は、物が重なりあうさま。「果実累累(果実が枝もたわわに実る)」。なお、第3句の「召」は「召命」の意かと思われます。

読み下して、その大意を口語文脈でたどると、次のようになりましょうか。

(管区事務所広報主事・鈴木 一)

(大意)「日本聖公会の百五十周年を祝す」 基(もと)を建てて百五十年。／あまたの艱難辛苦を乗り越えた先賢を深くおもう。／敬いて恩愛に感謝し、同じ召命を感じる。／今、たわわな佳き果実を主の御前に献げたい。



管区人権担当者協議会の報告

管区人権担当者 司祭 濱生正直

第10回人権担当者協議会が、2009年10月18日(日)19:00から20日(火)12:00まで、研修会場を羽曳野市人権文化センター、集会場所を大阪教区聖愛教会で開かれました。日曜日の夕刻からの開催は、フィールドワークのメインである「羽曳野市立南食ミートセンター」の営業日と営業時間に合わせるためでした。参加者は15名。

第1日目、大阪聖愛教会に集まり、開会礼拝後、各教区の報告と分かち合いが行われました。教区間には取り組みの違いはありますが、お互いの情報交換によって刺激が与えられています。ただ時間的な問題もあり、突っ込んだ話し合いにはなっていません。今後の課題だと思われれます。ハラスメント防止の対策は、各教区でそれなりに進んでいるように感じさせられました。

第2日目、早朝ホテルを出発し、羽曳野市の向野にあります、と畜場「南食ミートセンター」を部落解放キリスト者協議会の方々と合流し見学しました。食肉加工工場が立ち並ぶ一角に、と畜場がありました。正門から入り正面に小高い丘があり、消臭効果があるクスノキが植えられ、その中央に「畜魂碑」が建てられていました。

牛の解体処理工程は流れ作業になっていて、衛生管理上仕事場に入っただけの見学は全国的にできなくなっています。羽曳野のと畜場は外から窓越しに見学ができますので、見学を許可されている貴重な場所です。大きな牛が逆さまに吊り下げられ、割られ、手作業で内臓が

取り出され、空気圧を利用したカッターで皮と身にはがされていくようすはただ驚きでした。微妙な手の感覚で、熟練した職員がてきぱきと処理していくようすに、この人たちは「自分たちがやっている仕事は食文化に大いに貢献している」という誇りを持ってやっているという思いがしました。帰宅してパンフレットを整理してしましたら、次の言葉が目に入りました。「肉食産業においても、安全で安心できるお肉を私たちに提供するために、たくさんの人たちが働いています。しかしながら、食肉産業に関わる人たちに対して、誤った意識から根強い差別や偏見が残っています。牛や豚をと畜することは、生き物の生命を奪っているのではなく、私たちに生命をつないでいく一つの過程であり、私たちが豊かな食生活を営んでいくためには欠かせない仕事です。あらゆる仕事に上位・下位はありません。すべての人の人権が尊重される豊かな社会の実現のため、食肉産業への正しい理解をいただきますようお願いいたします」「毎日当たり前のように食事をし、<命>をもらっていることさえ忘れがちです。人間はいろいろな<命>をもらわなければ自分の命を延ばせないのです」と。と畜場見学で食べることに對しての意識が変えられました。

夕刻は聖公会生野センターを見学、新拠点募金の現状報告を受け、各教区に持ち帰り募金の訴えをするように確認をしました。

3日目、大阪聖愛教会で振り返りと今後の取り組みを話し合い、聖餐式をもって各地に散会しました。

渉外主事の報告から

東アジア主教会に出席して

管区事務所渉外主事 八幡眞也

2009年10月7日から12日までカンボジアの首都プノンペンで開催された恒例のCCEA主教・ExCo会議に出席したのでその報告を致します。

この会議はこの数年間アジアに於ける聖公会の宣教が初期段階にある地域・国で開催されて来たが、今回も同様にシンガポール教区が宣教の責任を持つカンボジアで開催された。不参加であった主教はオーストラリア・パース教区主教、東カオローン教区主教、香港島教区主教の3名。フィリピン聖公会の3主教が台風被害の影響で会議直前急遽参加を中止した。したがって参加した主教はフィリピン聖公会4名、大韓聖公会3名、東南アジア(SEA)聖公会5名、香港聖公会1名、台湾聖公会1名、日本聖公会1名、ミヤンマー聖公会5名、フィリピン独立教会(IFI)1名合計21名、夫人7名、



(東アジア主教会の模様)

Executive Committee メンバー3名が参加した。

カンボジアは内戦が長期間続いた後、崩壊した国の体制を現在構築中である印象を受けた。たとえばある時期所謂インテリ層が多数抹殺されたために、現地のあるクメール人聖職は18歳になるまで正式な教育を受ける機会が無かったと訴えていた。

会議は恒例の様に各教区の状況報告、現地の宣教に関する課題の勉強会とその情報の共有などであった。特記する事としては南東アジア管区の教勢が伸びている事であった。その管区内の東マレーシア教区の主教が数年間に現在の教区を分割したいと勢い良く語った。その他歴史や現地の状況の理解を深めるためにポルポト政権時の政治犯拘留所跡を見学し、聖公会の宣教活動の一部である職業訓練施設

を視察した。また、恒例に従って主日には現地の教会の礼拝に出席した。

1975年から1979年迄続いたポルポト政権時に情報収集と親政権への洗脳のために大量の政治犯が拘留された場所の一つを見学した。毎日情報収集のための拷問と再教育が行われていた場所である。非人道的な扱いを受け、殆ど全員が別の場所で処刑された。その数は国全体で200万人とも言われている。当時の施設がそのまま保全され、収容されていた人たちの写真が展示されていた。表示された収容所のルールには「質問には即答する事」、「政治犯からの一切の質問を禁止する事」、「指示される通りの行動をする事」、「鞭打ちや電気ショック等の罰を受ける際は声を出していいけない事」、等と書かれていて、如何に人権が無視されていたかを語っている。

シンガポール教区の支援で設立され運営も同教区が一部支援している職業訓練施設を視察した(プノンペンから車で約2時間の距離にある小さな村にあった)。スキルを持って

いないために職につけない18歳から25歳までの青年に対して英語教育を基本とし(社会に出て時給の高い職業に付くためには英語が必須である)、英語の実力が必要なレベルに達するとホテルのフロント関連、料理関連或いは客室整備関連の職業訓練に移行する。カンボジアではホテル関連の職業が生活を確立するための良い手段である。家庭の援助が無くて職業訓練を受ける事が出来ない青年層をこの様に支援している。この施設は年間100名程度の卒業生を輩出している。

主日(10月11日)には会議参加者が4グループに分かれ、礼拝に参加した。私はクメール語会衆の朝の礼拝に参加した。会衆は我々外部の人を含めて約40名で男性青年が多かった。聖餐式は殆ど持たれない様だ。今年のシンガ

ポール教区管轄のバンコクの聖公会の教会の礼拝と同様で、音楽はエレキギター、キーボード、ドラムの伴奏楽器の構成で若者が好むものであった。式文は全てクメール語、司式は信徒(と思われる)、説教者は同行した司祭でこの際のみ我々のために英語の通訳が行われた。

次回のCCEA主教・ExCo会議は2010年10月6日(水)から11日(月)香港島教区で開催の予定です。

○カンボジアで開催した理由

カンボジアはシンガポール教区が宣教の責任を担っていて、国情が安定して以降ようやくキリスト教の宣教を始める事ができた。最近まではシンガポール教区から派遣されていた担当者がサポートしていたが、ようやく現地の担当者が育ち、独自の宣教活動を開始した所である。

この様な教会の状況と国情を理解し、CCEAの活動の参考にしたいという事で今回の開催に至った。

○プノンペンの現状

プノンペンはカンボジアの首都であり、他の東南アジア諸国の大都市と同じ様な状況である。人があふれていて、車の数が多く(きちんと整備された車が大半で、Lexusのサインが入った車が多かったが、恐らく現地のみで有効なブ

ランドと思われる)、中心街の交通渋滞は大変なものである。単車と自転車の数はそれほど多くなかった。

物価は食べ物やホテルの宿泊費で比較すると日本の約四分の一程度、タクシーは10分の一程度。街の人たちは活発そうで、店番の人や飲食店の従業員は観光客の取り込みに必死であった。物乞いの人はほとんど見かけなかった。地雷で身体不自由になった人(特に足を失った人)を時々見かけたが、この国の過去の問題が理解できるような気がした。

○聖公会運営の育成施設視察

シンガポール教区の支援で設立され運営も同教区が支援している職業訓練施設を視察した。18歳から25歳までの青年に対して英語教育を基本とし(社会に出て職業に付くためには英語が必須である)、必要なレベルに達するとホテルのフロント関連、料理関連或いは客室整備関連の職業訓練をする。カンボジアではホテル関連の職業が生活を確立するためのとても良い手段である。家庭の援助が無くて職業訓練を受ける事が出来ない青年層をこの様にして支援している。

施設にはホテルの客室やホテルのフロントを模した施設がありそれを利用して訓練をしている。

◆2009年9月29日に発生したサモア諸島津波による被災者緊急・復興支援のためにオーストラリア聖公会のABM(Anglican Board of Mission)に緊急援助資金から10万円を11月6日に送金致しました。それに対してABMから感謝の手紙を受け取りましたので、紹介いたします。(管区事務所 渉外主事 八幡眞也)

.....

2009年11月6日

日本聖公会の皆様

サモア諸島の津波のための募金を頂いたことを感謝します。

サモアの多くの村は島外の多数の人道的な考え方を持った方々や地域の教会の助けにより津波被害の緊急事態に懸命に対処しています。仕事を失い住む家に被害を受けた人々は復興に立ち向かっていますが、物的には困難な状況にあり、また、精神的にもトラウマに落ち入っています。

海岸一带に住んでいた人たちは内陸の親族や緊急避難住宅に移り住んでいます。住居の復興が少しずつ始まっていますが、建築資材の不足に苦労しています。また、飲料水の確保も困難です。災害を避けるための長期的対策を講じる必要があります、諸資源無しには復興作業を開始する事はできません。

集まった募金は現地のパートナーであるUniting Worldに送りました。この組織によりサモアにある教会を通じて被災者の緊急支援物資、食料や飲料水の確保や、長期的復興支援のために使われていることを報告致します。

主にあって

Melany Markham
広報及び募金責任者

《新刊紹介》

ルポ絵本 『世界一のパン ～チェルシーバンズ物語』

The Nurse and the Baker : The Story of Chelsea Buns in Obuse

特色：絵本とルポを組み合わせる新発想の編集に、美しい英訳を添える…



本書は、信州・小布施町でパンとお菓子の店「小布施岩崎」を営む岩崎小弥太さん(86)が、60年ほど前から作り続けているパン「チェルシーバンズ」の物語です。岩崎小弥太さんは日本聖公会の信徒です。新生療養所の2代目所長の糟谷伊佐久(かすや・いさく)医師の娘・しのぶさんと、昭和24年、新生礼拝堂にて、結婚式を挙げられました。今もお二人は、息子さんご夫妻とともに、毎朝、工房でパンやお菓子を作っておられます。

岩崎さんは、カナダ聖公会が建設・運営していた新生療養所(今の新生病院)のカナダ人看護師・ミス・パウルから、チェルシーバンズの作り方を習いました。故郷を思うミス・パウルと、新しいおいしさを求めつづける小弥太さん。二人の交流から生まれた小布施のパン、チェルシーバンズ。小布施でつむがれた、ささやかで、あたたかな物語が展開されていきますが、その背景には結核で苦しんでいた日本人を救うために、土地の購入から病棟の建設など物心両面で全面的に支援し、医師や看護師まで派遣してくれたカナダの人たちへの感謝の思いが込められています。



(岩崎さん夫妻)

文章には、英訳がついています。翻訳は、小布施町在住のハート・ララビーさんが担当し、美しい英文に仕上がりました。

「ルポ絵本」は、事実に基づいて構成した物語の絵本と、その背景となった歴史的事実や登場人物たちの生き方を、写真とともにまとめたルポルタージュの2編で構成する、新しい編集発想の

絵本です。

小布施のまちづくりの基本理念は「交流」です。先人たちは、昭和の時代が幕を開けて間もない、今から80年も前に、キリスト教の精神による結核の療養所を、賛否の激論の末に受け入れました。そこから始まった「交流」が、現在の小布施町の気風を育んでいます。

チェルシーバンズは、小布施の「交流」の歩みと風土の“結晶”ということもできるでしょう。

本書が、「プレゼントブック」としても愛され、広く末永く、日本とカナダをはじめ世界中の読者様に読み継がれていくことを、願っております。 (記・文屋 代表 木下 豊)

*『世界一のパン』 定価 1,890 円 〒 381-0204 長野県上高井郡小布施町飯田 45 文屋(ぶんや)刊
TEL: 026-242-6512



■おことわり カンタベリー大主教からのクリスマス・メッセージは次号に掲載の予定です。

日本聖公会管区事務所ホームページ: <http://www.nskk.org/province/>
☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。
comm-sec.po@nskk.org 広報主事(鈴木)宛て